

大阪大学埋蔵文化財調査室 年報 1



2004年3月
大阪大学埋蔵文化財調査委員会

大阪大学埋蔵文化財調査室 年報 1

序 言

大阪大学構内の埋蔵文化財についての調査成果をまとめた年報を、このたび刊行することになりました。周知のとおり、大阪大学豊中キャンパス（石橋団地）のある待兼山丘陵は、1983年に弥生時代の集落跡が発見されたことから、丘陵一帯が待兼山遺跡として、国の文化財台帳に登録され、周知の遺跡として文化財保護法の適用を受けることになりました。これを契機に本学において大学施設の整備充実と文化財の保護活用を調和させようという機運が高まり、1985年に埋蔵文化財調査委員会が発足し、埋蔵文化財調査室が調査にあたることとなりました。

その後、埋蔵文化財調査委員会では、1988年に『待兼山遺跡Ⅱ』を、2001年に『待兼山遺跡Ⅲ』を刊行し、豊中キャンパスでの調査成果を公開しております。また、2001年に実施した大阪大学中之島センター建設予定地（大阪市北区）における発掘成果についても、2003年に『久留米藩蔵屋敷跡』として刊行しました。

本書は、大阪大学の埋蔵文化財について最新の情報を得ることができるものです。また、出土遺物の一部は、大阪大学総合学術博物館常設展示において展示しています。本書とここに報告する埋蔵文化財が、地域の歴史資料として広く活用されることは、「地域に生き世界にのびる」という教育理念をかかげる大阪大学にとっても大変に喜ばしいことです。

末尾になりましたが、これらの調査を進めるうえで、ご指導ご助言をいただいた学内外の関係機関、とりわけ発掘にあたって多くの協力を賜った施設部関係各位には、改めて厚くお礼申し上げます。

2004年3月

大阪大学埋蔵文化財調査委員会
委員長 鷺田清一

例 言

- 1 本年報は、大阪大学構内の建設工事等に伴って大阪大学埋蔵文化財調査室が実施した文化財発掘・整理作業をまとめたものである。
- 2 発掘調査の主体は大阪大学（総長宮原秀夫）である。
- 3 発掘調査は、大阪大学埋蔵文化財調査委員会の指導のもと、同委員会専門委員が担当した。各年次の専門委員は以下のとおりである。清家章（1998年4月～2003年3月）、寺前直人（2003年4月～）。発掘調査の実施にあたっては豊中市教育委員会から適宜指導と助言を得た。また、施設部をはじめ学内関連部局から多大な御協力があった。
- 4 各調査の調査期間は文中に記した。
- 5 写真撮影は、調査担当の専門委員が中心となって行った。
- 6 2001年1月～2003年12月までに行われた大阪大学石橋団地内で行われた試掘調査と立会調査についても併せて報告を行った。2000年12月以前の調査に関しては、大阪大学発行の『待兼山遺跡』・『待兼山遺跡Ⅱ』・『待兼山遺跡Ⅲ』において報告が行われている。
- 7 大阪大学中之島センター建設用地内（大阪市北区中之島4丁目）の埋蔵文化財調査（2001年9月～2002年1月）によって出土した動物遺存体に関する調査研究成果についてもあわせて報告する。なお、本資料の整理・研究については2003年度サントリー文化財団人文科学・社会科学に関する研究助成（研究テーマ「遺跡出土動物遺存体に基づく近世食文化の研究」：代表 都出比呂志・大阪大学大学院文学研究科教授）を受けた。
- 8 本書の執筆は、清家章（高知大学人文学部助教授）・寺前直人（大阪大学大学院文学研究科助手）・中原計（徳島大学埋蔵文化財調査室助手）・丸山真史（京都大学大学院人間環境学研究科院生）・山崎健（名古屋大学生命農学研究科研究生）・三好玄（大阪大学文学研究科大学院生）・東影悠（大阪大学文学部研究生）が行い、分担は文末に記した。
- 9 編集は、寺前が担当した。

大阪大学埋蔵文化財調査室年報 1

目 次

序言
例言

第 I 章	2001～2003年の調査概要（寺前直人）	1
第 II 章	待兼山遺跡における発掘調査	3
1	軟式テニスコート工事に伴う埋蔵文化財調査報告（清家 章）	3
2	待兼ゾーン散策路および医療技術短期大学跡地情報・通信敷設工事に伴う埋蔵文化財調査報告 （寺前・三好 玄・東影 悠）	4
第 III 章	大阪大学における試掘調査と立会調査（清家・寺前）	8
第 IV 章	大阪市北区中之島久留米藩蔵屋敷跡出土の動物遺存体分析結果	19
1	遺跡の概要（寺前）	19
2	現地採取資料の概要（丸山真史）	19
3	動物依存体採取の作業過程（丸山）	19
4	貝 類（中原 計）	20
5	魚 類（丸山・山崎 健）	21
6	その他の動物遺存体（丸山）	22
7	ま と め（丸山・中原）	23

図・表目次

	頁		頁	
図 1	周辺の遺跡	（2）	図11 鉤実測図	（7）
図 2	A区全景	（3）	図12 配管工事立会調査（地点1）	（8）
図 3	B区全景	（3）	図13 基礎工学部本館改修に伴う電気工事掘削 立会調査（地点2）	（8）
図 4	C区全景	（3）	図14 中央変電所ケーブル埋設工事立会調査 （地点3）	（9）
図 5	待兼ゾーン散策路調査地点と周辺の遺構	（4）	図15 サイバーメディアセンター建設試掘調査 （地点4）	（9）
図 6	階段設置部分トレンチ平面図・断面図	（5）	図16 道路標識設置立会調査（地点5）	（9）
図 7	調査区遠景（東から）	（6）	図17 生物材料調整所立会調査（地点12）	（10）
図 8	調査区全景（東から）	（6）		
図 9	溝状遺構の検出状況（北から）	（6）		
図10	土師器実測図	（7）		

図18	明道館増設コンセント工事立会調査（地点13）	(10)	図32	学術研究実験棟創造工学センター新営工事 その他工事立会調査.....	(15)
図19	危険物薬品庫立会調査（地点14）.....	(11)	図33	超高压電顕センター研究棟建設工事立会調査	(15)
図20	生物材料調整所設備工事立会調査（地点18）	(11)	図34	情報系総合研究棟新営工事その他工事 立会調査.....	(15)
図21	先端科学技術センター・インキュベーション 施設立会調査.....	(11)	図35	中之島（旧医学部跡地）土壌プラント設置 立会調査.....	(15)
図22	総合研究棟建設立会調査（地点19）.....	(12)	図36	石橋団地内2001～2003年調査地点.....	(17・18)
図23	危険物薬品庫新鋭機械設備配管工事 立会調査（地点22）.....	(12)	図37	久留米藩蔵屋敷跡出土貝類遺存体.....	(20)
図24	特高変電所新設に伴う埋蔵文化財立会調査 （地点25）.....	(13)	図38	久留米藩蔵屋敷跡出土魚類遺存体.....	(22)
図25	基礎工学部本館校舎改修その他電気設備工事 立会調査（地点26）.....	(13)	図39	SK01出土ハマグリの殻長分布.....	(29)
図26	理学部本館校舎改修その他機械設備工事 立会調査（地点27）.....	(13)	図40	SK06出土ハマグリの殻長分布.....	(29)
図27	基礎工学部本館校舎改修その他電気設備工事 立会調査（地点28）.....	(13)	表1	2001年1月～2003年12月調査一覧.....	(1)
図28	基礎工学部本館校舎改修その他電気設備工事 立会（2）調査（地点29）.....	(14)	表2	出土貝類・魚類遺存体種名表.....	(28)
図29	理学部校舎改修その他機械設備工事 立会調査（地点31）.....	(14)	表3	久留米藩蔵屋敷跡SK01出土貝類一覧表	(29)
図30	理学部校舎改修その他機械設備工事 立会調査（地点31）.....	(14)	表4	久留米藩蔵屋敷跡SK06出土貝類一覧表	(29)
図31	基礎工学部本館校舎改修その他電気設備工事 立会（3）調査（地点32）.....	(14)	表5	久留米藩蔵屋敷跡SK01上層出土魚類遺存体 一覧表.....	(29)
			表6	久留米藩蔵屋敷跡SK01下層・SK06出土魚類 遺存体一覧表.....	(30)
			表紙写真：待兼ゾーン散策路調査地点		

第 I 章 2001年～2003年の調査概要

2001年1月から2003年12月までに行われた調査は、表1にあるように発掘調査3件、試掘調査1件、立会調査37件であった。うち吹田地区における調査は5件、中之島（旧医学部跡地）における調査は2件

であった。なお、大阪大学医学部跡地における中之島センター建設に際して実施した2001年10月から2002年1月の調査成果については、すでに報告書を刊行している。（寺前直人）

表1 2001年1月～2003年12月調査一覧

番号	調査名	地区名	調査者名	調査期間
地点1	配管工事立会調査	石橋	清家 章	20010126～010131
	中之島（旧医学部跡地）土壌洗浄プラント設置立会調査	中之島	清家 章	20010201～0202
地点2	基礎工学部本館改修に伴う電気工事掘削立会調査	石橋	清家 章	20010210
地点3	中央変電所ケーブル埋設工事立会調査	石橋	清家 章	20010214
地点4	サイバーメディアセンター建設試掘調査	石橋	清家 章	20010219
地点5	道路標識設置立会調査	石橋	清家 章	20010226
地点6	防球フェンス撤去作業立会調査	石橋	清家 章	20010305～010308
地点7	中山池遊歩道立会調査	石橋	清家 章	20010306～010308
地点8	文法経棟中庭オブジェ設置立会調査	石橋	清家 章	20010406
地点9	キャンパス情報ネットワーク設備工事立会調査	石橋	清家 章	20010707～010817
地点10	危険物薬品庫新鋭機械設備立会調査	石橋	長友朋子	20020911～020913
地点11	サイバーメディアセンター立会調査	石橋	清家 章	20011029
地点12	生物材料調整所立会調査	石橋	清家 章	20020919
地点13	明道館増設コンセント工事立会調査	石橋	清家 章	20020922
地点14	危険物薬品庫立会調査	石橋	清家 章	20020925
地点15	基礎工学部生物材料調整所配管工事立会調査	石橋	清家 章	20021022
地点16	理学部本館南側道路外部ガス配管工事立会調査	石橋	長友朋子	20021109
地点17	危険物薬品庫新営機械設備工事立会調査	石橋	清家 章	20021114
地点18	生物材料調整所設備工事立会調査	石橋	清家 章	20021115
	先端科学技術センター・インキュベーション施設立会調査	吹田	清家 章	20021118
地点19	総合研究棟建設立会調査	石橋	清家 章	20021121
地点20	理学部本館南側道路における配管工事立会調査	石橋	長友朋子	20021122
地点21	明道館暖房設備改修工事立会調査	石橋	長友朋子	20021204
地点22	危険物薬品庫新営機械設備配管工事立会調査	石橋	清家 章	20021121
地点23	特高変電所新営設備工事立会調査	石橋	清家 章	20021210
	先端技術センター立会調査	吹田	清家 章	20030114
地点24	特高埋設管工事立会調査	石橋	清家 章	20030311～0317
地点25	特高変電所新設に伴う埋蔵文化財立会調査	石橋	寺前直人	20030418・0422
地点26	基礎工学部本館校舎改修その他電気設備工事立会調査	石橋	寺前直人	20030620
地点27	理学部本館校舎改修その他機械設備工事立会調査	石橋	寺前直人	20030517
地点28	基礎工学部本館校舎改修その他電気設備工事立会調査	石橋	寺前直人	20030718
地点29	基礎工学部本館校舎改修その他電気設備工事立会(2)調査	石橋	寺前直人	20030719
地点30	基礎工学部本館改修工事立会(1)調査	石橋	高橋照彦	20030722・0724
地点31	理学部校舎改修その他機械設備工事立会調査	石橋	寺前直人	20030725・0815
地点32	基礎工学部本館校舎改修その他電気設備工事立会(3)調査	石橋	寺前直人	20030903
地点33	基礎工学部本館改修工事立会(2)調査	石橋	高橋照彦	20031118
	学術研究実験棟創造工学センター新営工事その他工事立会調査	吹田	寺前直人	20030520
	超高圧電顕センター研究棟建設工事立会調査	吹田	寺前直人	20030609
	情報系総合研究棟新営工事その他工事立会調査	吹田	寺前直人	20030908
地点34	軟式テニスコート工事に伴う調査	石橋	清家 章	20030213～0220
地点35	待兼ゾーン散策路および医療技術短期大学跡地情報・通信敷設建設に伴う調査	石橋	寺前直人	20031020～1120
	大阪大学中之島センター建設に伴う調査	中之島	清家 章 寺前直人	20010920～20020125

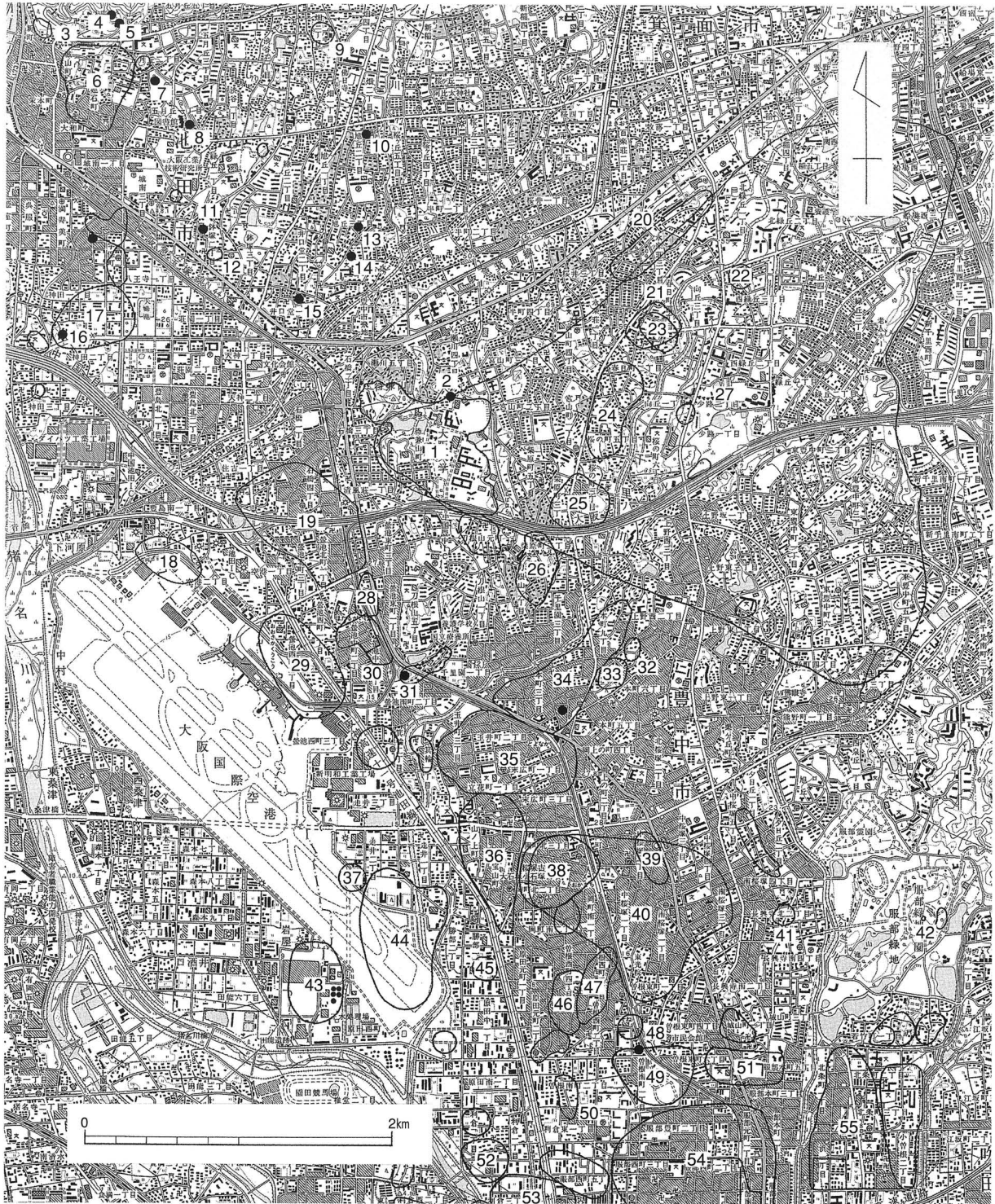


図1 周辺の遺跡

1. 待兼山遺跡 2. 待兼山古墳 3. 伊居太神社参道遺跡 4. 娛三堂古墳 5. 娛三堂南古墳 6. 池田城跡 7. 池田茶臼山古墳 8. 五月ヶ丘古墳
9. 京中遺跡 10. 野田塚古墳 11. 鉢塚古墳 12. 鉢塚南遺跡 13. 狐塚古墳 14. 石橋古墳 15. 二子塚古墳 16. 脇塚古墳 17. 神田北遺跡 18. 豊島南遺跡
19. 蛭池北(宮の前)遺跡 20. 太鼓塚古墳群 21. 野畑春日町古墳群 22. 野畑遺跡 23. 野畑春日町遺跡 24. 少路遺跡 25. 内田遺跡 26. 柴原遺跡
27. 桜井谷窯跡群 28. 蛭池東遺跡 29. 蛭池西遺跡 30. 蛭池遺跡 31. 麻田御神山古墳 32. 金寺山廃寺 33. 新免官山古墳群 34. 本町遺跡
35. 新免遺跡 36. 山ノ上遺跡 37. 走井遺跡 38. 岡町北遺跡 39. 岡町遺跡 40. 桜塚古墳群 41. 長興寺遺跡 42. 梅塚古墳 43. 原田西遺跡 44. 勝部遺跡
45. 勝部東遺跡 46. 原田遺跡 47. 曾根遺跡 48. 曾根東遺跡 49. 豊島北遺跡 50. 豊島南遺跡 51. 服部遺跡 52. 利倉遺跡 53. 利倉南遺跡
54. 穂積遺跡 55. 小曾根遺跡

第Ⅱ章 待兼山遺跡における発掘調査

1 軟式テニスコート工事に伴う埋蔵文化財調査報告

調査地点 極限物質センター北側（地点34）

調査期間 2003年2月13日～20日

調査担当 清家 章

調査の契機 2002年12月、軟式テニスコートを設置する計画が埋蔵文化財調査室に施設部から寄せられ、当地点における埋蔵文化財調査の必要性が、両者の間で協議された。予定地は、極限物質センターの北側に当たる。極限物質センター建設時（1987年）の試掘調査ならびに本調査において、遺構こそ少なかったものの古墳時代後期に属する埴輪と須恵器、ならびに瓦器・石鏃などが出土している。つまり、極限物質センター建設地点には複数の時期にまたがる遺跡がかつて存在したと、とくに埴輪の出土量が多いことから待兼山4号墳と後に名付けられた古墳が当地周辺に存在したことが明らかとなっている。当時、3箇所の調査区が設定されているが、そのうちのⅠ区からも埴輪片が出土しており、今回のテニスコート建設地点は、その1987年調査のⅠ区の隣接地点であることから、埴輪が出土する可能性と古墳に伴う遺構が検出される可能性が考えられたため、広い範囲に調査区を設定し調査を行うこととなった。

調査の成果 テニスコート建設地点に3箇所の調査区を設定した。南から順にA・B・C区と呼称し、規模はそれぞれ10m×7m、4m×1m、2m×2mである。

A区は1987年調査時のⅠ区の北側に隣接する。地山直上に造成土が70～100cm程度堆積していた。遺物の出土は認められなかった。

1987年調査時のⅠ区調査区においては、造成土の堆積がこれほど厚くはなかったことから、これらの造成土の大半は極限物質センター建設あるいは隣接するテニスコート建設工事に由来するものであろう。つまり、1987年調査時に埴輪が出土した造成土とは

由来が異なるので、今回は埴輪が検出されなかったと考えられる。

B区・C区では、表土直下から地山が検出された。遺物・遺構ともに認められなかった。（清家 章）



図2 A区全景



図3 B区全景



図4 C区全景

2 待兼ゾーン散策路および医療技術短期大学跡地情報・通信敷設工事に伴う埋蔵文化財調査報告

調査地点 旧医療技術短期大学敷地内

調査期間 2003年10月20日～11月20日

調査担当 寺前直人

調査の契機 2003年8月、旧医療技術短期大学敷地内において、散策路等を建設する計画が、埋蔵文化財調査室に施設部から寄せられた。今回の工事範囲のうち、大阪大学石橋側門に下る斜面階段建築予定地は、医療技術短期大学跡地試掘調査第9地点に該

当し（清家編2001）、階段予定地より南西約20mにおいて、奈良時代の土器棺（第9調査地点第2トレンチ）が発見されている。また、階段予定地より北東約20m地点でも、1988年、ガス整圧機移設工事に伴う試掘調査の際に羽釜などの中世土器片が出土している。つまり、当地点付近には複数の時期にまたがる遺構が存在しているのである。そこで、2003年9月12日に行われた埋蔵文化財調査委員会での検討を経て、2003年10月より本調査を実施した。

（寺前）

調査結果 調査地点は、待兼山の最高地点（77.28 m）南側の中山池に下る南斜面に位置する（図5）。

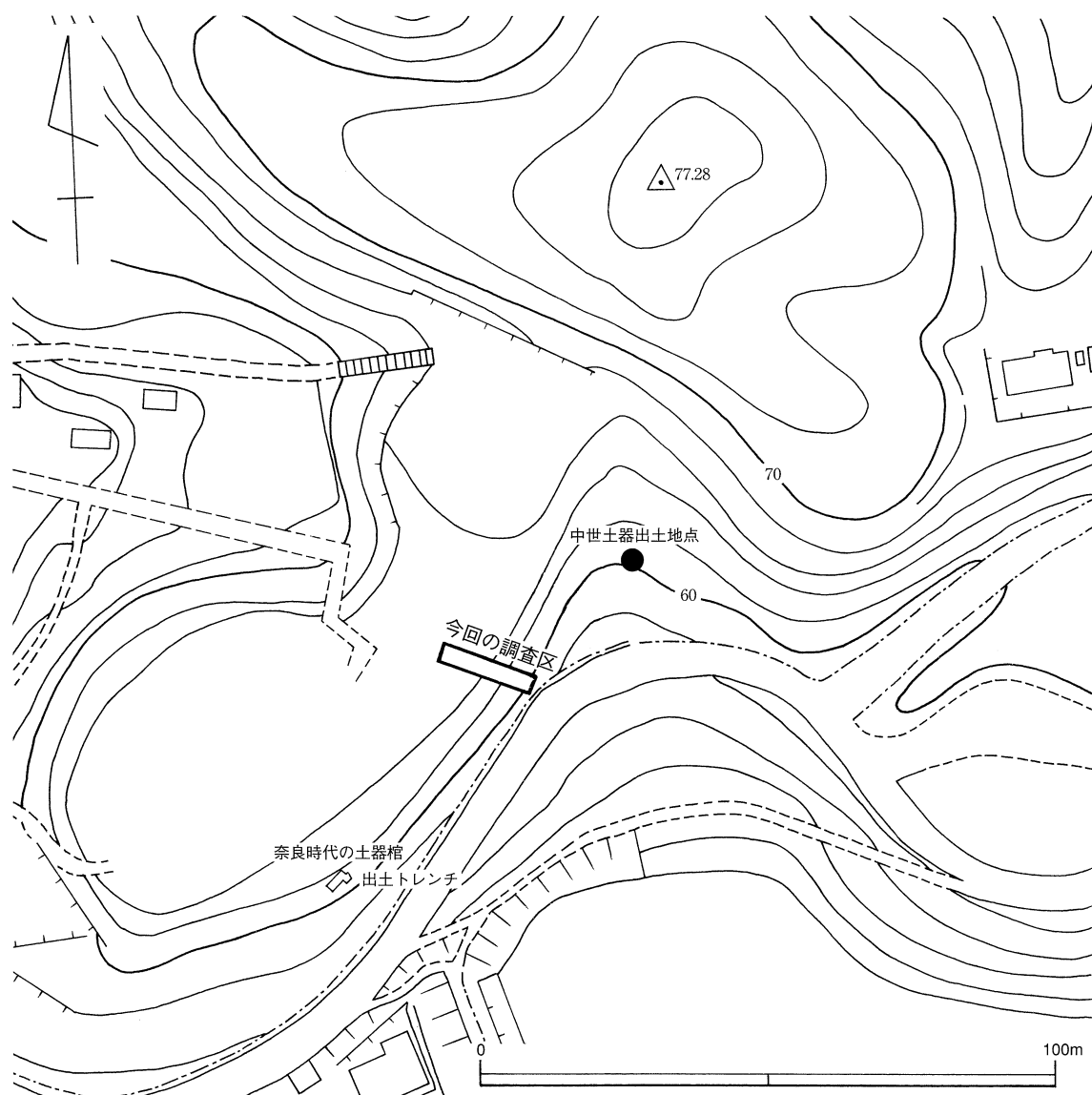


図5 待兼ゾーン散策路調査地点と周辺の遺構

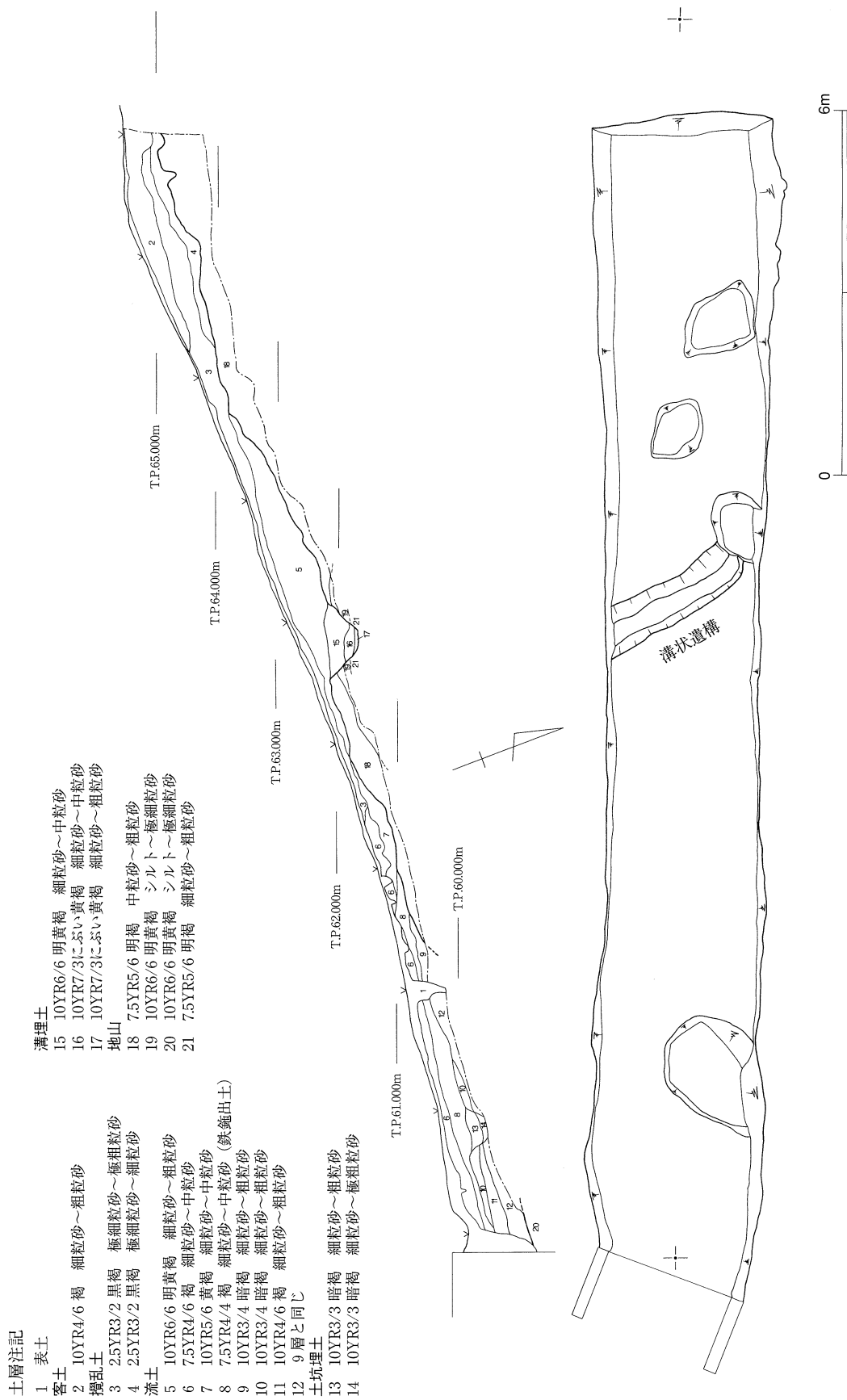


図 6 階段設置部分トレンチ平面図・断面図

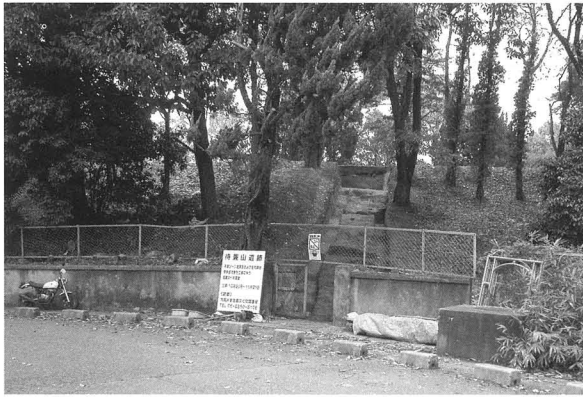


図7 調査区遠景（東から）



図8 調査区全景（東から）



図9 溝状遺構の検出状況（北から）

調査は階段設置と外灯配線他に伴う掘削範囲である全長20m、幅3mを対象とした。

トレンチ上部では表土と現代のものと思われる攪乱土の下層に地山を検出した。下半部では表土下に流土を検出し、その流土中からは遺物が出土した。遺物は古墳時代のものと考えられる鉢と土師器片である。また、トレンチ中央の流土下で溝状遺構を、下部では土壙を検出した。このうち溝状遺構は標高約62.0m、幅1.0m、深さ0.5mであるが、両端はトレンチ外へ伸びていくため全長は確認されていない。溝の方向が旧地形の等高線に沿うように位置することから標高62.0m付近でさらに伸びていくものと考えられる。ただし各遺構から遺物は出土していないため、ともに時期は不明である。（東影 悠）

出土遺物 図10は、調査区南端赤褐色土出土の土師器片である。器種、部位などは特定できないが、内面に縦方向と横方向のケズリ調整が認められる。外面は摩滅著しいがナデ調整が施される。胎土はやや粗く、2mm以下の白色砂粒を少量含む。色調は黄橙～明黄橙色を呈する。焼成は良好である。

調整を手がかりに帰属時期について考えてみよう。摂津地域において内面ケズリ調整の土器が認められるのは、おむね弥生時代後期～古墳時代にかけてである。また、外面の最終調整がナデであることから、弥生時代の甕の体部とは考えにくい。さらに弥生時代の壺で内面にケズリ調整を施すものはほとんど認められないことから、古墳時代に属するものと判断する。

図11は、同地点出土の鉄製鉈である。表面は錆に覆われ、本来の形状を伺うことが困難であるため、レントゲン写真を参考に実測図を作成した⁽¹⁾。基部端は欠損している。残存長14.4cm、刃部長2.9cm、基部幅0.65～0.78cm、基部厚さ0.4～0.45cmを測る。刃部最大幅は基部幅より大きく、刃部から基部への屈曲は不明瞭であり、刃部は鋌状と呼ばれるものに近い形態である。刃部付近に若干の反りが認められるが、明瞭な鑄、裏すきは確認できない。鋒端から約13cm付近で幅を減じる。基部幅に対して、厚さが非常に厚い点が特徴的である。基部の厚さは刃部に向

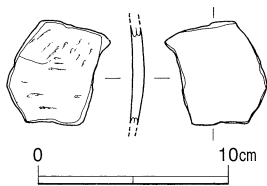


図10 土師器実測図

かうにつれて薄くなる。また、幅が狭くなる部位あたりから基部端に向かってもやや薄くなる。

この鉞の帰属時期について形態的特徴から考えてみたい。まず、刃部が鋸状を呈するという点については、古墳出土鉞の集成・分類を行った古瀬清秀のⅡa類に属するものと考えられる(古瀬1977)。古瀬のⅡa類は「刃部が鋸形で、刃部が関によって茎部と区分される」ものの中で、「刃部長が3cm未満」のものを指す。Ⅱa類は4世紀代の古墳に集中するとされている。

次に基部が非常に厚いという特徴について考えてみよう。本例のように基部幅に対する厚さの比率が7割程度という事例は、古墳時代前期～中期前半ではほとんどみつからない。中期後半の奈良県火野谷山3号墳、同寺口忍海H-16号墳などが古い事例となるようである。古墳時代後期前半にもこのような基部の厚い鉞が比較的多く認められるが、後期後半以降は鉞の古墳への副葬が非常に稀なものとなるため、様相は不明である。したがって刃部形態の類似した類例は古墳時代前期に多いことが指摘でき、一方、基部の特徴が類似した類例は中期後半から後期

に多く認めることができる。両者の特徴をあわせもつ類例は見つからなかったため、遺物からの検討ではいずれの時期か判断しがたい。

ただし調査地の周辺の状況を確認してみると、待兼山遺跡には古墳が存在することが知られている。それらは、古墳時代前期と中期後半を中心とした時期に造営がなされたと考えられている。調査地の西100mには中期後半の待兼山5号墳が存在する。また、中山池を南にはさんで対岸にも、中期後半の埴輪を出土した待兼山3・4号墳が存在する。したがって、鉞は古墳時代中期後半から後期前半頃に属するものと考えておくことが妥当であろう。

(三好 玄)

調査の成果 今回の調査では、溝状遺構が検出されたことが特筆される。溝状遺構は調査区外に伸びており、その範囲は不明であるが、旧地形斜面等高線にほぼ平行する位置に溝がめぐっていた可能性がある。したがって、この溝状遺構の続きは当地点周辺の標高63m付近に存在する可能性が高く、今後の開発行為に際しては、十分な注意を払う必要がある。また、待兼山遺跡においてはじめて鉄器が出土したことも重要である。鉞は先述したとおり、類例の少ないものではあるが、形態的特徴から古墳時代に属する可能性が高い。調査地点近辺における埴輪等の出土から中期後半の古墳副葬品であった可能性があり、待兼山古墳群の様相を理解する上で新たな手がかりを得ることができたといえよう。(寺前)

注

(1) 鉞について京都府埋蔵文化財調査研究センター野島永氏よりご教示をいただきました。記して感謝します。

参考文献

古瀬清秀1977「古墳出土鉞の形態的変遷とその役割」『考古論集-慶祝松崎寿和先生六十三歳記念論文集-』松崎寿和先生退官記念事業会

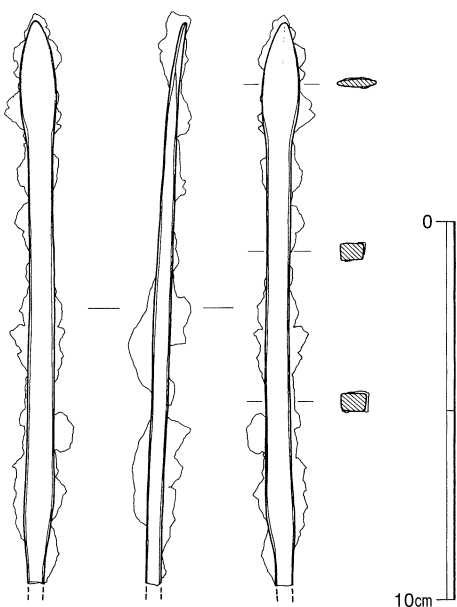


図11 鉞実測図

第三章 大阪大学における試掘調査と立会調査

大阪大学のキャンパスにはさまざまな時代の遺跡の存在が確認されている。石橋団地の全域が待兼山遺跡の中にあり、中之島の医学部跡地は近世の蔵屋敷跡として、周知の遺跡の範囲内にある。大阪大学では、大学内の遺跡の調査と保存に対応するため、「大阪大学埋蔵文化財調査委員会」を設置している。委員会では、学内の建設に伴う遺跡調査に関する事項を協議し、調査に関わる専門委員をおいて、種々の工事と調査に対応を行っている。

委員会指導の下、校舎建築工事などの大規模な工事や遺構や遺物が検出される可能性の高い地点に関しては試掘調査を行って、事前に埋蔵文化財の有無を確認している。配管や道路標識など軽微な工事に関しては立会調査を行って文化財の保全に対応している。

これまでに1988年と2001年に学術報告書を発行し、



図12 配管工事立会調査（地点1）

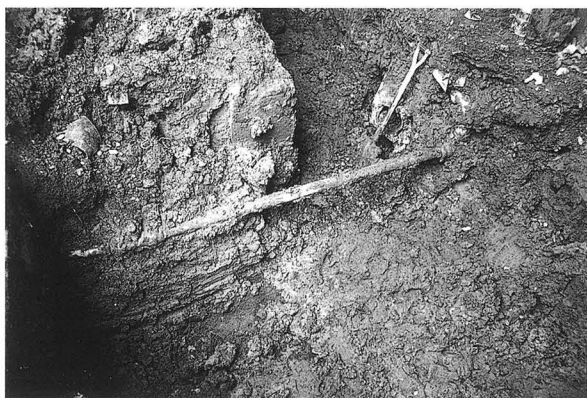


図13 基礎工学部本館改修に伴う電気工事掘削立会調査（地点2）

2000年12月までに行われた調査については、そこで報告がなされている（福永編1988・清家編2001）。それ以後も、本学構内では工事計画が中断なく続き、その度に調査を行っている。

本章では、2001年1月から2003年12月までに行われた調査について報告を行うものである。

なお、以下の報告の執筆は、基本的に調査担当者が行っている。調査報告の番号は表1と図36の調査地点番号に対応している。（寺前）

参考文献

- 福永伸哉編 1988『待兼山遺跡』Ⅱ、大阪大学埋蔵文化財調査委員会
清家 章編 2001『待兼山遺跡』Ⅲ、大阪大学埋蔵文化財調査委員会

1 配管工事立会調査（地点1）

担当者 清家 章 調査日程 010126～010131
調査結果 乳母池の西側・北側にある道路端と附属図書館前の浪高庭園内を掘削した。配管配置のため現地地表下40cm～1mまで掘削する予定であった。いずれの箇所も配管設置深度まで掘削したが、造成土が確認されただけであり、掘削範囲に包含層・遺構・遺物は認められない。

2 中之島（旧医学部跡地）土壌洗浄プラント設置立会調査（図35）

担当者 清家 章 調査日程 010201～010202
調査結果 プラント設置部分の汚染土壌を除去した。現地地表下1.5mで汚染土壌は存在し、その直下から江戸時代の蔵屋敷跡の遺構が検出された。また、攪乱部分をさらに掘り下げたところ、その断面において現地地表下2.5mの地点でも遺構が確認され、少なくとも2面の遺構面が存在することが明らかとなった。

3 基礎工学部本館改修に伴う電気工事掘削立会調査（地点2）

担当者 清家 章 調査日程 010210

調査結果 現地表から2 m下まで掘削したが、造成土の範囲内であった。遺物も出土しなかったため、工事に支障はないと判断された。

4 中央変電所ケーブル埋設工事立会調査（地点3）

担当者 清家 章 調査日程 010214

調査結果 ケーブルを埋設する掘方部分を調査。現地表下80cmまで造成土が確認され、その直下から地山が検出された。

5 サイバーメディアセンター建設試掘調査（地点4）

担当者 清家 章 調査日程 010219

調査結果 乳母池を埋め立てて建設をするため、池の堤防の斜面に3本のトレンチを設定して試掘を行った。もっとも西側のトレンチでは、地山まで削平を受けたようで、造成土の直下から地山が検出された。

残る2本のトレンチからは厚さ40～130cmの造成土の下から旧表土が検出され、旧地形をとどめていることが判明した。今回の範囲からは遺構と遺物が検出されなかったが、旧地形が保存されていることから、須恵器の窯址が遺存している可能性も考えられるので周囲の開発には注意が必要である。

6 道路標識設置立会調査（地点5）

担当者 清家 章 調査日程 010226

調査結果 標識設置の掘方は60cm四方で、深さは1 mであったが、造成土が検出されたのみで遺構・遺物は認められなかった。

7 防球フェンス撤去作業立会調査（地点6）

担当者 清家 章 調査日程 010305～010308

調査結果 防球フェンスの撤去作業時に、掘削範囲

の土層観察を行ったが、フェンス支柱の基礎は造成土の範囲内に収まっており、遺構・遺物は認められなかった。

設置時にも立ち会いを行っている。

8 中山池遊歩道立会調査（地点7）

担当者 清家 章 調査日程 010306～010308

調査結果 コンクリートブロックを撤去し、切り通しの道を拡張する工事であった。削平する部分の土



図14 中央変電所ケーブル埋設工事立会調査（地点3）



図15 サイバーメディアセンター建設試掘調査（地点4）



図16 道路標識設置立会調査（地点5）

層観察を行ったところ、腐植土直下から地山を検出した。過去にすでに削平され、旧地形をとどめないものと判断されるが、過去に周辺から土器が採取されていることから、その造成規模は大きくはなかったと考えられる。

9 文法経棟中庭オブジェ設置立会調査 (地点8)

担当者 清家 章 調査日程 010406

調査結果 オブジェ設置の基礎部分を掘削し、土層観察を行った。基礎設置のための掘削は現地地表下50cmまでだったが、造成土の範囲内であったので工事続行を指示した。

10 キャンパス情報ネットワーク設備工事立会調査 (地点9)

担当者 清家 章 調査日程 010707～010817

調査結果 イ号館・日本学棟・基礎工学部棟・理学

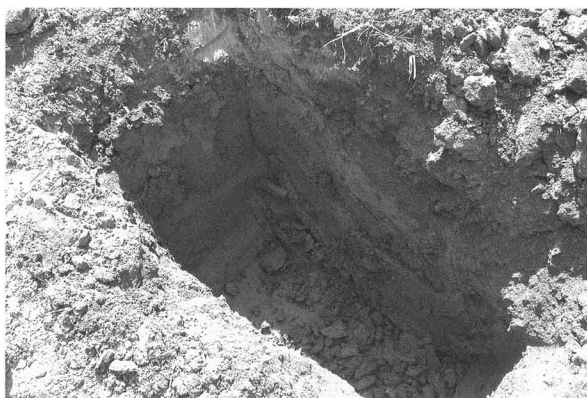


図17 生物材料調整所立会調査 (地点12)



図18 明道館増設コンセント工事立会調査 (地点13)

部棟・宇宙物理学棟・原子物理学棟の周辺にケーブルを埋設するための工事に立ち会った。おおよそ現地地表下60～75cmの掘削を要する工事であったが、原子物理学棟を除いて、造成土の範囲に掘削は収まった。

原子物理学棟では現地地表下20cmで旧地表を検出した。遺物・遺構は認められなかったが、原子物理学棟付近は旧地形が保存されている可能性があるため、今後周辺の開発には注意が必要である。

11 危険物薬品庫新鋭機械設備立会調査 (地点10)

担当者 長友朋子 調査日程 020911～020913

調査結果 配水管設置箇所を約1m掘削した。造成土の範囲内に収まり、遺構・遺物は検出されなかった。

12 サイバーメディアセンター立会調査 (地点11)

担当者 清家 章 調査日程 011029

調査結果 乳母池埋め立て工事の後、池底に遺物と遺構が存在するかどうかを試掘坑を設定して確認を行った。湧水が激しく、さらに試掘坑が崩壊する危険があったため、短時間での観察しかできなかったが、現地地表から-3.3mまでは埋め立て土であり、それより下は池のヘドロを地盤改良材で固めた土層であった。遺物・遺構は認められなかった。

13 生物材料調整所立会調査 (地点12)

担当者 清家 章 調査日程 020919

調査結果 建築範囲に2箇所の試掘坑を設定した。ともに地表下1.5mまで掘削したが、造成土が検出されたのみで、遺構・遺物ともに認められなかった。

14 明道館増設コンセント工事立会調査 (地点13)

担当者 清家 章 調査日程 020922

調査結果 3箇所の試掘坑を設置した。掘削深度は50cmであったが、造成土の中に収まった。工事に支障はなかった。

15 危険物薬品庫立会調査 (地点14)

担当者 清家 章 調査日程 020925

調査結果 建築範囲に1箇所の試掘坑を設定した。2.5mまで掘削したが、造成土が検出されたのみで、遺構・遺物ともに認められなかった。

16 基礎工学部生物材料調整所配管工事立会調査 (地点15)

担当者 清家 章 調査日程 021022

調査結果 地表下100cmまで掘削。造成土の範囲内。

17 理学部本館南側道路外部ガス配管工事立会調査 (地点16)

担当者 長友 朋子 調査日程 021109

調査結果 配管工事に立ち会ったが、共同溝の再掘削であったので工事に支障はなかった。

18 危険物薬品庫新鋭機械設備工事立会調査 (地点17)

担当者 清家 章 調査日程 021114

調査結果 掘削深度は70cm。アスファルトとその下のバラス直下から造成土を検出。遺構遺物ともに認められなかった。

19 生物材料調整所設備工事立会調査 (地点18)

担当者 清家 章 調査日程 021115

調査結果 掘削深度は50cm。造成土の範囲内に掘削は収まる。遺構遺物ともに認められなかった。

20 先端科学技術センター・インキュベーション施設立会調査 (図21)

担当者 清家 章 調査日程 021118

調査結果 池部分を埋め立てるため、池の堤防とその斜面を調査した。重機掘削限度まで掘り下げたが、造成土が認められたにすぎない。おそらくもとの池の範囲は、調査時のそれよりも広く、調査地点は埋め立て部分であったと考えられる。



図19 危険物薬品庫立会調査 (地点14)



図20 生物材料調整所設備工事立会調査 (地点18)



図21 先端科学技術センター・インキュベーション施設立会調査

21 総合研究棟建設立会調査（地点19）

担当者 清家 章 調査日程 021121

調査結果 3箇所の試掘抗を設定した。西端の試掘抗では、現地地表下40cmで、中央は2m、東端は150cmで地山を検出した。中央の地山検出レベルが低いのは、谷地形があったことを示すのかもしれない。堆積土は造成土である。遺物・遺構ともになし。

22 理学部本館南側道路における配管工事立会調査（地点20）

担当者 長友朋子 調査日程 021122

調査結果 理学部南側における配管工事に立ち会い、土層の観察を行った。掘削部分は均質な粘土からなる造成土であった。



図22 総合研究棟建設立会調査（地点19）



図23 危険物薬品庫新鋭機械設備配管工事立会調査（地点22）

23 明道館暖房設備改修工事立会調査（地点21）

担当者 長友朋子 調査日程 021204

調査結果 2箇所を掘削したが、ともに造成土の範囲内に工事深度が収まるので工事に支障はなかった。

24 危険物薬品庫新鋭機械設備配管工事立会調査（地点22）

担当者 清家 章 調査日程 021121

調査結果 配管工事のための掘削で、現地地表下70cmまで掘削したが、造成土の範囲内であった。

25 特高変電所新鋭設備工事立会調査（地点23）

担当者 清家 章 調査日程 021210

調査結果 地表下1mまで掘削したが、造成土の範囲内であった。

26 先端技術センター立会調査

担当者 清家 章 調査日程 030114

調査結果 建築工事範囲内に3箇所の調査区を設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。

27 特高埋設管工事立会調査（地点24）

担当者 清家 章 調査日程 030311～17

調査結果 配管工事の掘削部分を立ち会った。ほとんどは造成土の範囲内に収まった。

28 特高変電所新設に伴う埋蔵文化財立会調査（地点25）

担当者 寺前直人 調査日程 030418・0422

調査結果 現地地表2m付近までは灰色粘質土の造成土がみられた。その最下層には10cm弱の酸化鉄層が広がる。さらにその下層では厚さ1m前後の砂層がみられた。この砂層以下が地山に相当するとみられる。砂層（地山）中では厚さ5～10cm程度の水平方向に堆積する細かな単位が確認できた。その下層、現地地表下3.5～5mの範囲には青灰色粘土層がみられた。

**29 基礎工学部本館校舎改修その他電気設備工事
立会調査（地点26）**

担当者 寺前直人 調査期間 030620

調査結果 深さ最大1.2mの掘削に立ち会った。地表下25cmにおいて造成土がみられ、その下からは地山が検出された。

**30 理学部本館校舎改修その他機械設備工事
立会調査（地点27）**

担当者 寺前直人 調査期間 030517

調査結果 地表下約2.6mの掘削を行った。土層は地山起源とみられるブロック土を含むものの、レンガ細片や炭が混じる造成土であった。遺物、遺構は認められなかった。

**31 基礎工学部本館校舎改修その他電気設備
工事立会調査（地点28）**

担当者 寺前直人 調査期間 030718

調査結果 地表下約1m下までの掘削に立ち会い、トレンチ東端より土留めとみられる丸太組を伴う垂直の堀方が検出された。ただし、この堀方土中よりゴム板やタイルが出土していることから、現代の掘削に伴うものであると判断した。また、地表下30cmから黄褐色粘土その下層では灰色粘土の水平堆積が確認された。大阪層群であるとみられる。

**32 基礎工学部本館校舎改修その他電気設備
工事立会（2）調査（地点29）**

担当者 寺前直人 調査期間 030719

調査結果 電気設備工事に伴う掘削範囲のうち、基礎工学部本館C棟出入口前部分（前回6月20日立会）より西側の部分の掘削に立ち会った。全長20m、深さ50cmの掘削に立ち会った。東側から15mの範囲では、地表下15cmより地山層とみられる層位が確認された。残り5mの部分は、旧浄化槽のため破壊されておられ、造成土のみが検出されている。



図24 特高変電所新設に伴う埋蔵文化財立会調査（地点25）



図25 基礎工学部本館校舎改修その他電気設備工事立会調査（地点26）



図26 理学部本館校舎改修その他機械設備工事立会調査（地点27）



図27 基礎工学部本館校舎改修その他電気設備工事立会調査（地点28）



図28 基礎工学部本館校舎改修その他電気設備工事立会（2）調査（地点29）



図29 理学部校舎改修その他機械設備工事立会調査（地点31）



図30 理学部校舎改修その他機械設備工事立会調査（地点31）



図31 基礎工学部本館校舎改修その他電気設備工事立会（3）調査（地点32）

33 基礎工学部本館改修工事立会（1）調査（地点30）

担当者 高橋照彦 調査期間 030722・0724

調査結果 本館南面と西面の深さ70cm程度の掘削に立ち会った。ほとんどの箇所が既設の配管などによって攪乱を受けていた。攪乱が少ない箇所では地表下55cm付近で地山を検出している。

34 理学部校舎改修その他機械設備工事立会調査（地点31）

担当者 寺前直人 調査期間 030725・0815

調査結果 理学部校舎西側の5地点にて地表下1.5mの掘削に立ち会った。いずれの地点からも地表下40～60cmより地山とみられる粘土層の堆積が確認された。ただし、地山層の様相は各調査地点により異なる。

35 基礎工学部本館校舎改修その他電気設備工事立会（3）調査（地点32）

担当者 寺前直人 調査期間 030903

調査結果 基礎工学部本館西面に接する位置において地表下2.9mの掘削に立ち会った。樹木等の有機質を含む造成土のみが検出された。

36 基礎工学部本館改修工事立会（2）調査（地点33）

担当者 高橋照彦 調査期間 031118

調査結果 基礎工学部本館西面に接する箇所、地表下1.6mの掘削に立ち会った。灰色粘質土が検出された。

37 学術研究実験棟創造工学センター新営工事その他工事立会調査（図32）

担当者 寺前直人 調査地点 吹田団地・レーザー核融合センター北側 調査期間 030520

調査結果 地表下6m下までの掘削のうち、最下層の状況に立ち会った。最下層において地山（大阪層群）が確認された。

38 超高圧電顕センター研究棟建設工事 立会調査 (図33)

担当者 寺前直人 調査地点 吹田団地・犬飼池
西側 調査期間：030609

調査結果 工事に伴う切土（重機掘削）に立ち会い、土層の堆積状況および遺物の有無の確認を行った結果、旧地形は比較的残存していることが判明した。土層の観察を行った崖面は現状で、高さ5mをはかり、うち上部の0.5～1mの範囲で表土が認められた。表土中（黄褐色中粒砂）では竹の根が顕著に認められた以外、遺物を包含する堆積および遺構の存在は確認されなかった。

39 情報系総合研究棟新営工事その他工事 立会調査 (図34)

担当者 寺前直人 調査地点 吹田団地・コンベンションセンター西側 調査期間 030908

調査結果 表土下3m下までの掘削が行われた。地表下1.5m付近において大阪万博開催時の駐車場跡とみられるアスファルト面が確認された。それ以下は炭や木の根などを含む灰褐色の粘土であり、造成土であるとみられる。



図32 学術研究実験棟創造工学センター新営工事その他工事立会調査



図33 超高圧電顕センター研究棟建設工事立会調査



図34 情報系総合研究棟新営工事その他工事立会調査



図35 中之島（旧医学部跡地）土壌プラント設置立会調査



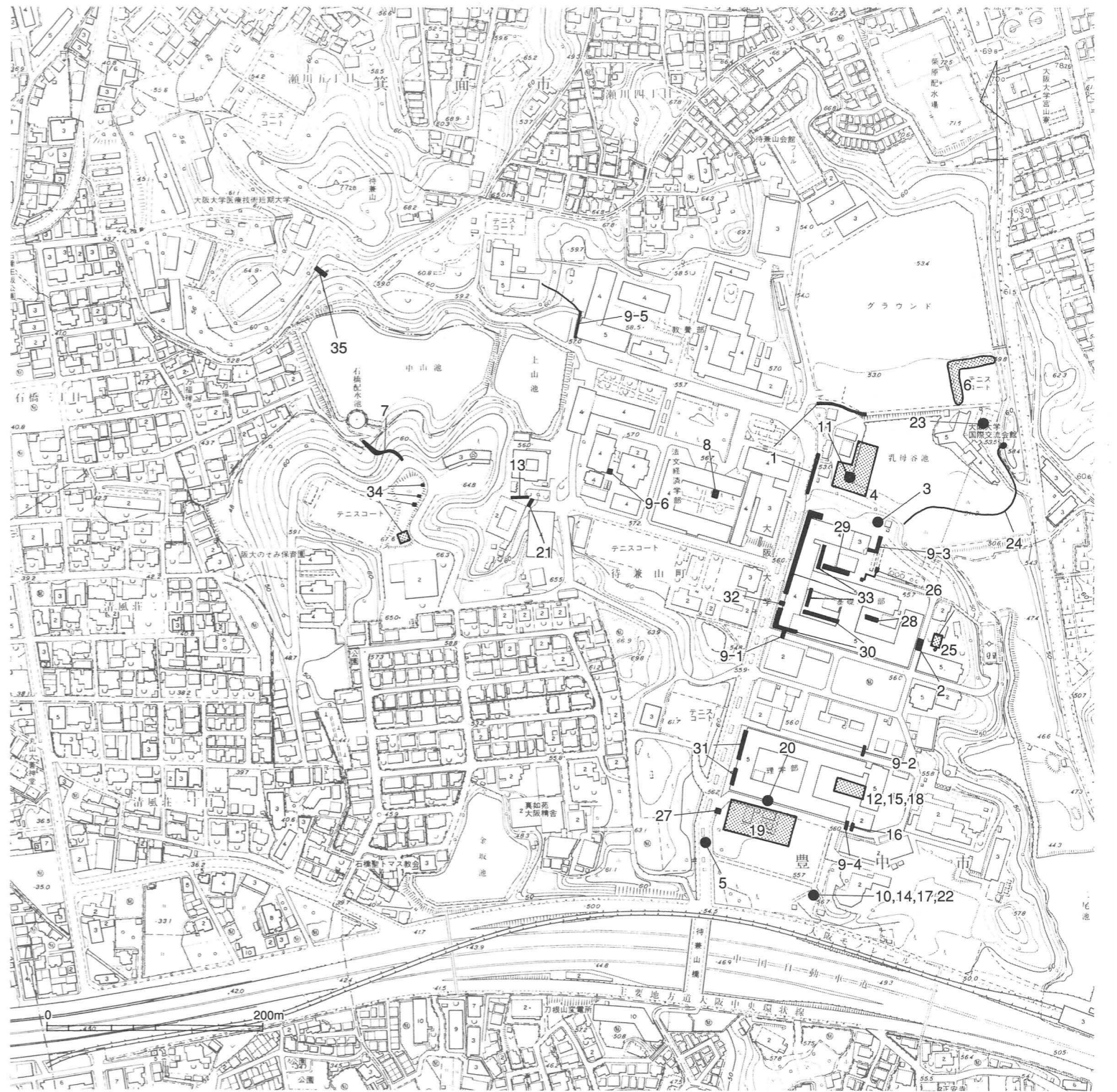


図36 石橋団地内2001～2003年調査地点

第IV章 大阪市北区中之島久留米藩蔵屋敷跡出土の動物遺存体分析結果

1 遺跡の概要

久留米藩蔵屋敷跡は、大阪市北区中之島に所在する。大阪大学医学部跡地における中之島センター建設に際して、2001年10月から2002年1月にかけて、埋蔵文化財調査室が調査を行った。その結果、遺構面が4面確認され、井戸やゴミ穴等が見つかった第1面は18世紀第2四半世紀から明治期まで、畝畝間とみられる溝が検出された第2面は18世紀初頭に、そして同じく畝跡が検出されている第3・4面はわずかな出土遺物からではあるが、17世紀初頭であるとみられる(長友編2003)。

これらのうち、敷地境石組みをはじめとする多数の遺構が見つかった第1面のなかでも、遺物が多数検出されたSK01とSK06の埋土、それぞれ半分ずつ(土嚢袋約80袋)を持ち帰った。

SK01は長辺1.7m、短辺1.2m、深さ0.6mの平面長方形の土坑である。粗砂を基盤層として掘り込まれているにもかかわらず、四方の壁体はほぼ垂直に落ちる。このような掘方が長期にわたって維持されたとは考えられず、したがって掘削後、きわめて短時間の間にSK01は埋め戻されたと判断できよう。出土陶磁器類によれば、本土坑は18世紀第2四半世紀に属する。篩にかけたのは当土坑埋土約1200リットルのうちの半分約600リットルである。

SK06はSK01の南西約2mの位置で検出されており、長辺1.3m、短辺0.9m、深さ0.8mの平面長方形の土坑である。SK01同様、壁は垂直に落ち、掘削直後に埋め戻されたとみられる土坑である。当土坑埋土約900リットルの約半分450リットルを篩にかけた。出土陶磁器によれば、時期は18世紀第3四半世紀とみられ、SK01より新しい時期に形成されていることには、注意が必要である。

動物遺存体のうち、発掘調査現場において目視により採取したものについては、2003年に報告しているが、これらの土壤内に残存する遺存体については

報告できなかった。そこで2003年度にサントリー文化財団人文科学、社会科学に関する研究助成(代表文学研究科教授都出比呂志)を受け、これらの水洗選別を進めた。以下では本年度において2つの遺構の動物遺存体の様相を報告した後、以前の目視採取資料をふまえて考察を行う。(寺前)

2 現場採集資料の概要

以前、報告した動物遺存体は、全て調査中に目に付いたものを採取した資料である(中原・丸山2003)。そこでは、貝類、魚類、爬虫類、鳥類、哺乳類が確認できた。哺乳類以外は、屋敷内で食料として消費されたものと考えられる。動物遺存体が出土したのは、土坑、溝、井戸など全部で13基の遺構からである。動物遺存体が多く出土したのは、SK01、SK06、SK18で、貝類と魚類が大部分を占める。

貝類、魚類、爬虫類、鳥類、哺乳類の出土状況は、貝類では、ハマグリが最も多く、ついで、ヤマトシジミ、アカガイが出土した。魚類では、マダイが圧倒的に多く、カツオ、スズキがつづき、爬虫類はスッポンのみが出土した。鳥類は、ガン・カモ科とニワトリ属、哺乳類は、ニホンザル、クマネズミ属、ウマが出土した。

(丸山真史)

3 動物遺存体採取の作業過程

発掘調査現場で目に付いたものを採取するだけでは、微細な遺物を取り残している可能性を考え、動物遺存体が多く出土したSK01とSK06の埋土を持ち帰り、水洗選別を行った。水洗選別には、5mm、3mm、1mmメッシュの篩を重ね、その中に持ち帰った土壌を入れた後、水道水によって土の塊をほぐしながら、下方に通過させた。それぞれの篩の上に残ったものを採取し、土器片、動物遺存体、その他を分別した。5mmと3mmの篩上に残ったものは一括し、1mmの篩上に残ったものは、別にしておいた。

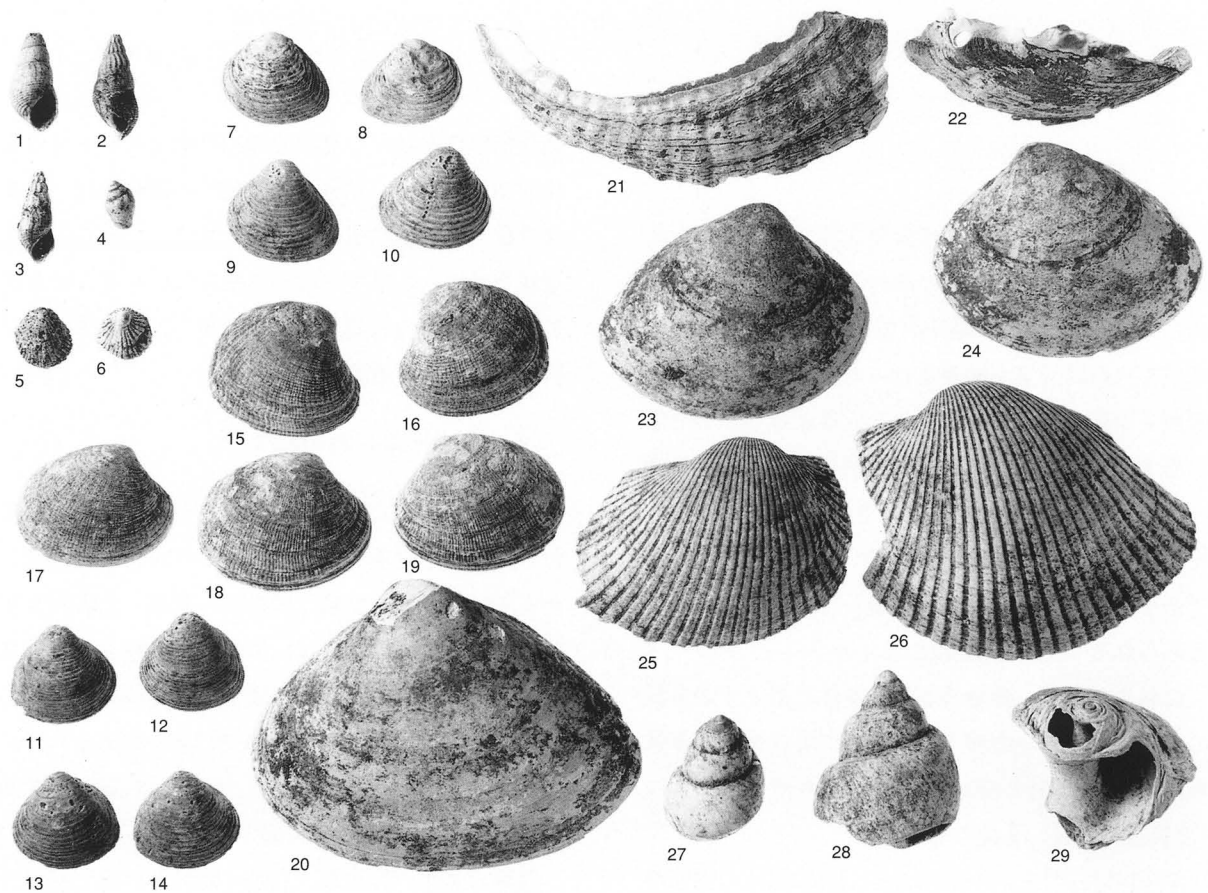


図37 久留米藩蔵屋敷跡出土貝類遺存体

1・2 カワニナ 3 ホソウミニナ 4 フトコロガイ 5・6 トサスソキレ 7~10 セタシジミ 11~14 ヤマトシジミ/マシジミ 15~19 アサリ 20 チョウセンハマグリ 21・22 クロアワビ 23・24 ハマガリ 25・26 アカガイ 27 オオタニシ 28 パイ 29 ツメタガイ

その結果、陶磁器などの小片とともに、多くの貝殻や魚骨など動物遺存体を採取することができ、資料化することが可能となった。今回の報告では、整理作業が進んでいる、5mmと3mmの篩で採取した資料を報告する。(丸山)

4 貝類

SK01 SK01からは6種類201個体が出土している(表2)。このうち篩によって検出されたのは54個体である。最も多いのはシジミ類(ヤマトシジミ、マシジミ)であり118個体、次いでハマグリが63個体である。ハマグリは40mm以上の比較的大きなものばかりである。他には、クロアワビ、サザエ、アカガイなどの大型貝類が出土している。

SK06 SK06からは23種類1928個体が出土している(表3)。このうち篩によって検出されたのは1891個

体である。最も多いのはシジミ類(ヤマトシジミ、マシジミ)で1504個体、次いでハマグリが252個体出土している。ハマグリには20~35mm程度の小型のものと50~80mm程度の大型のものがみられる。他には、クロアワビ、サザエ、アカガイなどの大型貝類とオオタニシ、アサリなど小型貝類が出土している。また、トサスソキレ、フジツボ、フトコロガイなど食用ではないものも含まれている。

まとめ 篩による水洗選別を行った結果、貝類について、最も特筆すべき点は、SK06からアサリが48個体検出されたことである。それにより、これまで近畿地方の近世遺跡からはほとんど検出されていなかったアサリがまとまって出土する遺構が存在することが判明した。つまり、当時の大坂においてもアサリを食べていた人が存在したということがいえる。しかし、そのアサリの入手方法については現状では

不明であり、今後他の遺物と合わせて検討していく必要がある。また、久留米藩蔵屋敷跡においてはSK06からのみの出土であるが、SK01、SK06以外は篩による水洗選別を行っていない。SK01については貝類の組成が異なるために出土しなかった可能性が考えられ、他のゴミ捨て穴には捨てられていた可能性はあると思われる。

つぎに、SK01とSK06とで捨てられているハマグリの大きさの分布が異なることが判明した⁽¹⁾。SK01では40~60mmに偏る傾向がみられる、単峰形のグラフになる(図39)。それに対して、SK06では30~35mmのものと55~60mm前後の2箇所分布が集中する双峰形のグラフとなる(図40)。

このことは、阿部常樹によって、捨てられている貝類組成と関連性がある可能性が指摘されている(阿部2002)。SK01とSK06とでは、出土している貝類の全体量は圧倒的にSK06のほうが多いが、クロアワビ、サザエ、アカガイなどの大型貝類の量を比較すると、ほとんど変わらない。つまり、SK01では大型の貝類が捨てられており、SK06には大型のものに加えて小型のものも捨てられているといえる。そのため、本資料においても、阿部の指摘が当てはまり、SK01とSK06とでは廃棄の背景が異なると考えられる。

また、SK06においては、ハマグリのサイズによる調理方法の差も認められる⁽²⁾。40mm以上の比較的大きなものは表面が比熱したと考えられるものが多く、また、破損の激しいものも多い。それに対して、20mm~40mmの小さなものは保存状態がよく、表面に光沢があり、模様が明瞭である。このことは、桜井準也によって指摘されているように(桜井1992)、小さなものは吸い物として、大きなものは焼かれて食べられたと考えられる。

これらのことから、ハマグリのサイズと捨てられている貝類組成との関連性や遺存状態をみると、東京の近世遺跡出土の資料から指摘されていることが本資料にも当てはまることが分かった。つまり、貝類の扱われ方は、関西と関東では同じであったということが指摘できる。

今後の課題としては、久留米藩蔵屋敷におけるアサリの入手方法やSK01とSK06との廃棄の背景の差が挙げられ、これらについても検討していく必要がある。(中原 計)

5 魚 類

エイ類

椎骨3点出土した。残存椎体径は3.3mmである。

サメ類

椎骨1点出土した。残存椎体径は3.6mmである。

ウナギ属の一種

椎骨7点出土した。

ハモ属の一種

歯骨2点、主鰓蓋骨2点、椎骨12点出土した。椎骨1点に、強く火熱を受け白色を呈するものがある。大阪や京都を代表する種類で、近世遺跡でも一般的に見られる。

マイワシ

主上顎骨1点、角骨4点、舌顎骨8点出土した。ほとんどが体長20cm以下と推測される。

ニシン科の一種

椎骨25点、尾部棒状骨2点出土した。ニシンやマイワシ、コノシロ、サッパなどが含まれるが、種の同定には至らなかった。

カタクチイワシ

舌顎骨2点出土した。両方とも体長20cm以下と推測される。

コイ

咽頭骨が2点出土した。現生標本との比較から、体長30~40cm程度、20cm弱と推定される。

ギンブナ

咽頭骨9点出土した。現生標本との比較から、8点は体長20cm以下で、1点のみ20~25cm程度と推測される。

ニゴロブナ

咽頭骨5点出土した。現生標本との比較から、2点は15cm以下、3点は20~25cm程度と推測される。琵琶湖の固有種である。



図38 久留米藩蔵屋敷跡出土魚類遺存体

1・2 スズキ {1前上顎骨(L) 2歯骨(L)} 3 ハモ歯骨(R) 4 シイラ属前上顎骨(R) 5~7 フサカサゴ科 {5主上顎骨(L) 6主上顎骨(R) 7歯骨(L)}
 8~10 {8椎骨 9前鰓蓋骨(R) 10角骨(L)} 11・12 フグ科 {11前上顎骨(R) 12椎骨} 13 ミシマオコゼ科擬鰓骨(L) 14 エソ科前上顎骨(L) 15 サケ属
 椎骨 16・17ヒラメ {16主上顎骨(R) 17椎骨} 18 ムロアジ属主鰓蓋骨(L) 19 アイゴ科 20 サワラ椎骨 21 カツオ椎骨 22・23 アジ科 {22前上顎骨(R) 23
 角骨(R)} 24・25 フナ属 {24舌顎骨(R) 25咽頭骨(R)} 26~33 アマダイ科 {26主上顎骨(L) 27擬鰓骨(R) 28主鰓蓋骨(R) 29角骨(L) 30角骨(R) 31方骨(L)
 32舌顎骨(R) 33舌顎骨(R)} 34 ブリ属歯骨(L) 35 クエ主鰓蓋骨(R) 36~57 マダイ {36前頭骨(L) 37前頭骨(R) 38主上顎骨(L) 39主上顎骨(R) 40前上顎骨
 (L) 41前上顎骨(R) 42歯骨(L) 43歯骨(L) 44角骨(L) 45角骨(R) 46舌顎骨(L) 47舌顎骨(L) 48舌顎骨(R) 49方骨(L) 50方骨(R) 51主鰓蓋骨(L) 52主鰓蓋骨
 (R) 53主鰓蓋骨(R) 54口蓋骨(L) 55口蓋骨(R) 56椎骨57上擬鰓骨(L)} 58 マダラ椎骨

フナ属の一種

咽頭骨11点、舌顎骨1点が出土した。いずれも破片のため、種の同定には至らなかった。

コイ科の一種

咽頭骨1点、背鰭棘1点、角骨1点、椎骨10点が出土した。

ナマズ属の一種

前上顎骨1点、胸鰭棘1点、椎骨3点が出土した。ナマズもしくはイワトコナマズ等が考えられるが、種の同定には至らなかった。

アユ

椎骨1点が出土した。現生標本との比較から、全長20cm程度と推測される。

サケ属の一種

椎骨1点が出土した。残存椎体径が9.4mmである。

エソ科の一種

前上顎骨1点が出土した。練り物などに利用されることが多い。

マダラ

主上顎骨1点、方骨1点、基後頭骨2点、副蝶形骨1点、椎骨9点が出土した。椎骨5点に切断され

た痕跡が見られる。西日本では、日本海側でのみ漁獲される。

スケトウダラ

歯骨1点が出土した。マダラ同様、日本海側でのみ漁獲される。

タラ科の一種

椎骨12点が出土した。マダラ、スケトウダラのいずれかであるが、同定には至らなかった。椎骨2点に切断された痕跡が見られる。

ボラ科の一種

主鰓蓋骨1点、椎骨9点が出土した。ボラ、メナダなどが含まれるが、形態に類似する点が多く、出土試料から種の同定には至らなかった。

フサカサゴ科の一種

前上顎骨3点、主上顎骨3点、歯骨3点、角骨1点、前鰓蓋骨1点、擬鎖骨1点、椎骨3点が出土した。同科には多くの種が含まれ、形態に類似する点が多く、種を同定することが困難である。主上顎骨1点に切断された痕跡が見られる。

オコゼ類

主鰓蓋骨1点、前鰓蓋骨1点が出土した。オニオコゼに類似するが、特徴が異なる部分があるためオコゼ類とした。

ホウボウ科の一種

擬鎖骨1点が出土した。ホウボウやカナガシラが含まれるが、出土試料から種の同定には至らなかった。

コチ科の一種

角骨1点、方骨1点、前鰓蓋骨1点、椎骨14点が出土した。角骨、方骨、前鰓蓋骨は、コチに類似する。椎骨で種の同定は困難である。椎骨1点に切断された痕跡が確認できた。

トビウオ科の一種

椎骨2点が出土した。大阪や京都の近世遺跡では、出土量は少ないが、しばしば見られる。

スズキ

前上顎骨2点、歯骨2点、主鰓蓋骨1点、前鰓蓋骨1点、副蝶形骨1点、椎骨5点が出土した。スズキは出世魚として知られ、これらのうち8点がフッ

コ（体長約30cm以上）、1点がスズキ（体長約60cm以上）である。

クエ

主鰓蓋骨1点が出土した。1mを越える大形の種類であるが、本試料は現生標本との比較から体長20~30cm程度と推測される。

マハタ属の一種

主上顎骨1点が出土した。マハタ、キジハタなどが含まれるが、形態に類似する点が多く、種の同定には至らなかった。

ハタ科の一種

椎骨1点が出土した。この他、ハタ科と思われる前鰓蓋骨1点も出土している。

アマダイ属の一種

主上顎骨点、歯骨1点、角骨1点、方骨1点、主鰓蓋骨2点、擬鎖骨2点、舌顎骨1点、椎骨1点が出土した。シロアマダイ、キアマダイなどが含まれるが、形態での区別は困難である。

シイラ属の一種

前上顎骨1点、椎骨3点が出土した。現生標本との比較から、前上顎骨は体長40~50cm程度の個体と推測される。

マアジ属の一種

主鰓蓋骨1点、舌顎骨1点が出土した。現生標本との比較から、体長20~30cm、30~40cm程度と推測される。主鰓蓋骨に切断された痕跡が見られる。

ムロアジ属の一種

方骨1点、主鰓蓋骨1点、上耳骨2点が出土した。マアジ属とは異なり、沿岸外海に生息する。現生標本との比較から推測される体長は、20~30cmが2個体、30~40cmが1個体である。

ブリ属

歯骨1点、主上顎骨1点、椎骨5点が出土している。現生標本との比較から、いずれも体長60cm以下であり、椎骨はかなり小さな個体である。

アジ科の一種

前上顎骨4点、主上顎骨3点、歯骨2点、角骨5点、方骨4点、椎骨52点が出土した。

マダイ

前頭骨12点、上後頭骨2点、前上顎骨12点、主上顎骨12点、歯骨6点、角骨7点、方骨15点、主鰓蓋骨12点、前鰓蓋骨7点、擬鎖骨3点、口蓋骨8点、椎骨22点などが出土した。最も多く出土した種類である。前頭骨、主鰓蓋骨などに切断、切傷の痕跡が見られる。

キダイ？

キダイと思われる上後頭骨1点出土した。

タイ科の一種

前上顎骨1点、主上顎骨1点、歯骨1点、角骨1点、方骨1点、主鰓蓋骨1点、前鰓蓋骨3点、椎骨31点出土した。

ニベ科の一種

前上顎骨2点、主上顎骨4点、歯骨1点、方骨1点、肩甲骨1点、椎骨13点出土した。ニベやイシモチが含まれるが、種の同定には至らなかった。

キス科の一種

歯骨1点出土した。現生標本との比較から全長20cm弱と推測される。

サバ属の一種

主上顎骨1点、歯骨1点、方骨3点、椎骨16点出土した。

カツオ

主上顎骨1点、方骨1点、基鰭骨1点、椎骨18点出土した。

サワラ

椎骨2点出土した。近世遺跡での出土は少ない。体長1mとなる大型の種類であるが、本試料は2点とも、現生標本との比較から、体長30cm以下の個体と推測される。

ミシマオコゼ科の一種

擬鎖骨1点、不明部位1点出土した。現代では水産上の価値が低く、練り物などに使用される。

ハゼ科の一種

主上顎骨2点出土した。近世には釣りの対象として人気のあった種類である。

アイゴ科の一種

椎骨が1点出土した。近世遺跡では、大坂魚市場

跡について2例目となる。椎骨で種の同定は困難である。

カマス科の一種

前上顎骨1点、歯骨1点、椎骨16点出土した。椎骨のほとんどが全長32cmの現生標本より、ひとまわり小さな個体である。歯骨は、アカカマスに似る。椎骨1点に切断痕が認められる。

ヒラメ

主上顎骨1点、椎骨3点出土した。体長20~30cmが2個体と40~50cmが2個体と推定される。椎骨1点に切断された痕跡が見られた。

カレイ科の一種

擬鎖骨1点出土した。現生標本との比較から体長20cm程度と推測される。

ウシノシタ科の一種

椎骨6点出土した。いわゆるシタピラメなどが含まれるが、種の同定は困難である。

フグ科の一種

前上顎骨2点、主上顎骨1点、椎骨1点出土した。椎骨には切断された痕跡が見られる。種の同定には至らなかったが、大形のフグが含まれる。

(丸山・山崎 健)

6 その他の動物遺存体

爬虫類

ヘビ亜目

椎骨が1点出土した。

スッポン

烏口骨1点、肩甲骨2点、腸骨1点、大腿骨2点、椎骨3点出土した。肩甲骨1点および大腿骨1点には切断された痕跡が確認できる。

鳥類

ガン・カモ科の一種

カモ類の尺骨1点、橈骨1点、脛ふ骨1点、足根中足骨1点、第二指骨4点出土した。

ニワトリ属の一種？

ニワトリ属の一種と思われる烏口骨1点出土した。

ムクドリ？

ムクドリと思われる尺骨1点出土した。

哺乳類

イタチ科の一種

下顎第三大臼歯が1点出土した。

クマネズミ属の一種

上顎骨3点、下顎骨3点、上腕骨1点、大腿骨1点
が出土した。

ネズミ科の一種

大腿骨4点、踵骨1点、中足骨1点、椎骨4点、
指骨1点出土した。

その他

小形の食肉類の上顎骨1点、小形の哺乳類の肩甲
骨1点、小形の哺乳類の大腿骨1点出土した。い
ずれも、関節部を失っていることなどから、種の同
定には至らなかった。 (丸山・山崎)

7 まとめ

以前の報告とあわせ、SK01とSK06に関してま
とめを行う。現場で採取した資料では、貝類6種、魚
類は7科3属3種の出土であった。水洗選別で採取
した資料には、新たに貝類1科14種、魚類11科4属
12種が含まれていた。これらをあわせ、貝類1科20
種、魚類18科7属15種が出土した。

貝類で最も特徴的であるのは、SK06でアサリが
出土したことである。貝類の項でも述べているが、
大阪近辺の近世遺跡で、アサリが出土することは稀
で、48個体が検出されたことは、まとまった量のア
サリが獲得、消費、廃棄されたことを示している。
しかし、大坂魚市場跡から出土していないことや
『和漢三才図会』の記載から考えると、一般的に流
通、消費されるだけではなく、久留米藩蔵屋敷に居
住する人々の採集などが考えられ、それらを自家消
費していた結果であろう。

アワビやサザエ、ハマグリ、シジミは、一般的に
流通、消費される種類である。シジミは、ヤマトシ
ジミもしくはマシジミ、セタシジミが出土している。
これらは貝殻の形態に類似する点が多く、破片での
区別は難しい。ほぼ完全な形をとどめていたものを
区別したが、量的にはヤマトシジミもしくはマシジ
ミが圧倒的に多い。近世まではセタシジミが、淀川

水系にも生息していたことが確認されている。した
がってヤマトシジミもしくはマシジミとともに採集
されたものである可能性も考えられる。出土量から
考えるとシジミ類が最も多く出土しているが、一個
体の肉量は少なく、必ずしもシジミが中心的であっ
たとは考えられない。むしろ、次に多く出土したハ
マガリの方が、食材利用にも工夫が見られ、中心的
であったのではないだろうか。

一方、SK06からは食用とならないトサスソキレ、
フトコロガイなどが出土している。これらは、いず
れも小さな貝であり、意図的に屋敷に持ち込まれた
のではなく、他の貝類などに付着していたなどの理
由が考えられる。

魚類では、マダイが最も多く出土することは、近
世の都市部の消費地遺跡では一般的であり、出土魚
類の中でも庖丁による切断や切傷の痕跡が最も多く
見られる。マダイの骨は、大きく頑丈で、保存状態
も良好であり、イヌなども飲みこむことが出来な
かったこと、全身が持ち込まれる機会が多かったこ
とに起因していると考えられる。また、キダイと思
われるものが出土しているが、その他のタイ科のチ
ダイやクロダイは含まれていない。近世には、クロ
ダイの消費が低調になることは既に指摘されおり
(久保1999)、久留米藩蔵屋敷でも同様のことが想定
され、タイ科と同定した種類にもクロダイが含ま
れる可能性は低いと考えられる。

また、ギンブナやニゴロブナといったフナ属が多
く出土しており、最小個体数で比較するとマダイの
次にギンブナが多く、久留米藩蔵屋敷における特徴
的な出土傾向と言える。ニゴロブナは琵琶湖にし
か生息しておらず、近世の大坂では身近な淀川水系
だけでなく、琵琶湖の資源なども利用されていたこ
を示している。

SK01ではアユが出土しており、大阪近辺の近
世遺跡での出土は稀である。アユの出土の希少性
は、遺跡での保存性やサンプリングの問題が考え
られる。アユの骨は小さく、薄いため、埋没中に分
解されやすく、発掘調査中にも目に付くことが少
ない。そのため、川魚の代表的な種類であるアユ
の消費が、こ

れまで皆無であると考えられることはなかった。しかし、本出土例によって消費されていることが事実となった。フナ属やアユ以外にもコイやウナギ属、ナマズ属といった代表的な淡水産魚類がまとまって出土しており、海水産魚類だけでなく淡水産魚類も幅広く利用し、多彩な食生活であったと推測される。

サケ属も一遺跡での出土量は少ないが、大阪の近世遺跡では、森ノ宮遺跡（久保 1996）、大坂魚市場（久保 1999）、につづき 3 例目である。遺跡での保存性の問題などから、良好な状態での出土が稀であると考えられる。大坂魚市場跡や森ノ宮遺跡でも出土していることから、近世の大坂では一般的な種類であった可能性がある。産地を特定することは困難であるが、生息環境から推測しても日本海側など北方からの搬入品である可能性が高く、塩蔵品などが流通、消費されていたのであろう。

一部の魚種について述べたが、全体として久留米藩蔵屋敷での水産資源の消費を検討すると、特に魚類は、多種を利用していることが特徴的である。江戸時代には、料理書が普及していることから、魚種によって料理方法が工夫され、多彩な食生活であったと考えられる。アワビやアカガイ、マダイやスズキなど高級とされる種類、バイガイやアジ、サバなど一般的な種類、そして消費が低調と考えられるアサリやウシノシタといった種類が同一遺構から出土している。このことは、武家屋敷での食生活が、常に贅沢な消費ではなかったことを示している。誰が食していたのかという問題について、屋敷内での身分による利用食材の相違も検討しなければならない。

そこで、遺構による出土傾向の相違について検討する必要がある。SK01とSK06にみられる、貝類、魚類の出土傾向に相違があったことは興味深い。貝類、魚類ともに、SK06が量的にも、種類数でも豊富である。

SK01では破片点数比でアジ科が22%、サバ属が10%で多く出土し、SK06では最小個体数比でマダイが18%、フナ属が15%と多く出土した。種類に関しては、アジ科やサバ属、マダイ、フナ属などは、両遺構に共通して出土しているのに対し、SK01、

SK06それぞれでしか出土しなかった種類がある。

SK01では、エイ類、サメ類、アユ、ウナギ属、カマス科、キス科、トビウオ科、ハゼ科、ブリ属である。SK06では、サケ属、カタクチイワシ、スケトウダラ、ミシマオコゼ科、サワラ、エソ科、ホウボウ科、ヒラメ、ウシノシタ科などである。これらどちらか一方でしか出土しなかった種類には、骨自体が小さいものや薄いものが多い。本来、両遺構に廃棄されたが、保存されなかった可能性を無視できず、当時の廃棄状態を完全に反映していると考えすることは難しい。しかし、このような遺構による出土の相違が生じた背景には、時期差や日常と非日常、先にも述べた身分による相違などが考えられる。

現段階では、明確に説明をすることは難しく、今後、このような事例をまとめ、検討していかなければならない。動物遺存体だけでなく、他の遺物の性格を考慮する必要もあるだろう。そして、文献史料などによって、当時の食材に対する意識なども視野に入れていかなければならない。

このように、多種の魚類遺存体が出土したことは、久留米藩蔵屋敷での消費が多様であったことが第一であるが、保存状態が良好であったことや遺構内の土壌を水洗選別したことも、その一因としてあげられる。今回は、3 mmまでの篩によって検出された動物遺存体の分析にとどまったが、アサリやアユ、サケ属、マダラなど、大阪において、わずかにしか報告例がない種類を得られたことは、大きな成果であった。小さな遺物を採取できる以外にも、保存性に優れない種類や消費量の少なかったかもしれない種類も採取できる可能性もあることが指摘される。今後は、1 mmの篩で得られた資料についても報告を行う予定である。（丸山）

以上の同定作業は、貝類が中原、SK01出土魚類は山崎、SK06出土魚類は丸山が行っている。また、SK06出土の魚類遺存体整理には、大阪大学の廣藤紀子の協力を得た。動物遺存体の同定には、奈良文化財研究所埋蔵文化財センター松井章氏の協力を得た。

注

- (1) ハマグリ以外の貝類については、どちらの遺構から出土したのも単峰型を示し、違いは認められない。
- (2) SK01ではほとんどすべてのハマグリが焼変を受けたと考えられ、遺存状態も悪い。このことからSK01とSK06とでは廃棄の背景が異なるといえる。

参考文献

阿部常樹2002「江戸遺跡出土ハマグリのサイズの解釈に関する試論」『國學院大學考古学資料館紀要』第18輯
久保和士1996「動物遺存体の調査結果」『森ノ宮遺跡Ⅱ』
(財)大阪市文化財協会

久保和士1999『動物と人間の考古学』真陽社
桜井準也1992「遺跡出土の動物遺体からみた大名屋敷の食生活－動物遺体分析の成果と問題点－」『江戸の食文化』吉川弘文館
長友朋子編2003『久留米藩蔵屋敷跡－大阪大学中之島センター建設に伴う調査報告－』大阪大学埋蔵文化財調査委員会
中原計・丸山真史2003「分析」『久留米藩蔵屋敷跡－大阪大学中之島センター建設に伴う調査報告－』大阪大学埋蔵文化財調査委員会

表2 出土貝類・魚類遺存体種名表

軟体動物門 Mollusca	アユ科 Plecoglossidae
腹足綱 Gastropoda	アユ <i>Plecoglossus altivelis</i>
古腹足目 Vetigastropoda	サケ科 Salmonidae
ミミガイ科 Haliotidae	サケ属の一種 <i>Oncorhynchus</i> sp.
クロアワビ <i>Haliotis discus</i>	ヒメ目 Aulopiformes
サザエ科 Turbinidae	エソ科 Synodontidae
サザエ <i>Turbo cornutus</i>	エソ科の一種 Synodontidae, gen. et sp. indet
スカシガイ科 Fissurellidae	タラ目 Gadiformes
トサソキレ <i>Emarginula tosaensis</i>	タラ科 Gadidae
ニシキウズガイ科 Trochidae	マダラ <i>Gadus macrocephalus</i>
キサゴ <i>Umbonium costatum</i>	スケトウダラ <i>Theagra chalcogramma</i>
盤足目 Discopoda	タラ科の一種 Congridae, gen. et sp. indet
ウミニナ科 Batillariidae	ボラ目 Mugilomorpha
ホソウミニナ <i>Batillaria cumingii</i>	ボラ科 Mugilidae
タマガイ科 Naticidae	ボラ科の一種 Mugilidae, gen. et sp. indet
ツメタガイ <i>Glosaulax didyma</i>	カサゴ目 Scorpaeniformes
新腹足目 Neogastropoda	フサカサゴ科 Scorpaenidae
アキガイ科 Muricidae	フサカサゴ科の一種 Scorpaenidae, gen. et sp. indet
アカニシ <i>Rapana venosa</i>	ホウボウ科 Triglidae
フトコロガイ科 Columbellidae	ホウボウ科の一種 Triglidae, gen. et sp. indet
フトコロガイ <i>Euplica scripta</i>	コチ科 Platycephalidae
エゾバイ科 Buccinidae	コチ科の一種 Platycephalidae, gen. et sp. indet
バイ <i>Balytonia japonica</i>	メダカ目 Cyprinodontiformes
二枚貝綱 Bivalvia	トビウオ科 Exocoetidae
フネガイ目 Arcoida	トビウオ科の一種 Exocoetidae, gen. et sp. indet
フネガイ科 Arcidae	スズキ目 Perciformes
アカガイ <i>Scapharca broughtonii</i>	スズキ科 Percichthyidae
カキ目 Ostreoida	スズキ <i>Lateolabrax japonicus</i>
イタヤガイ科 Pectinidae	ハタ科 Serranidae
イタヤガイ <i>Pecten albicans</i>	クエ <i>Epinephelus bruneus</i>
イタボガキ科 Ostreidae	マハタ属 <i>Epinephelus</i> sp.
イタボガキ科の一種 Ostreidae, gen. et sp. indet	ハタ科の一種 Serranidae, gen. et sp. indet
マルスダレガイ目 Veneroida	アマダイ科 Malacanthidae
バカガイ科 Mactridae	アマダイ属の一種 <i>Brandiostegus</i> sp.
バカガイ <i>Mactra chinensis</i>	シイラ科 Coryphaenidae
シジミ科 Corbiculidae	シイラ属の一種 <i>Coyphaena</i> sp.
ヤマトシジミ <i>Corbicula japonica</i>	アジ科 Carangiae
セタシジミ <i>Corbicula sandai</i>	マアジ属の一種 <i>Trachurus</i> sp.
マルスダレガイ科 Veneridae	ムロアジ属の一種 <i>Decapterus</i> sp.
アサリ <i>Ruditapes philippinarum</i>	ブリ属 <i>Seriola</i> sp.
ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>	アジ科の一種 Carangiae, gen. et sp. indet
チョウセンハマグリ <i>Meretrix lamarckii</i>	タイ科 Sparidae
オキシジミ <i>Cyclina sinensis</i>	マダイ <i>Pagrus major</i>
脊椎動物門 Vertebrata	キダイ? <i>Dentex tumifrons</i>
軟骨魚綱 Chondrichthyes	タイ科の一種 Sparidae, gen. et sp. indet
サメ類 Lamniformes fam., gen. et sp. indet	ニベ科 Sciaenidae
エイ類 Rajiformes fam., gen. et sp. indet	ニベ科の一種 Sciaenidae, gen. et sp. indet
硬骨魚綱 Osteichthyes	キス科 Sillaginidae
ウナギ目 Anguilliformes	キス科の一種 Sillaginidae, gen. et sp. indet
ウナギ科 Anguillidae	サバ科 Scombridae
ウナギ属の一種 <i>Anguilla</i> sp.	サバ属の一種 Scombridae, gen. et sp. indet
ハモ科 Muraenesocidae	カツオ <i>Katsuwonus pelamis</i>
ハモ属の一種 <i>Muraenesox</i> sp.	サワラ <i>Scomberomorus niphonius</i>
ニシン目 Clupeiformes	ミシマオコゼ科 Uranoscopidae
ニシン科 Clupeidae	ミシマオコゼ科の一種 Uranoscopidae, gen. et sp. indet
マイワシ <i>Sardinops melanostictus</i>	ハゼ科 Gobiidae
ニシン科の一種 Clupeidae, gen. et sp. indet	ハゼ科の一種 Gobiidae, gen. et sp. indet
カタクチイワシ科 Engraulidae	アイゴ科 Siganidae
カタクチイワシ <i>Engralis japonicus</i>	アイゴ科の一種 Siganidae, gen. et sp. indet
コイ目 Cyprinida	カマス科 Sphyraenidae
コイ科 Cyprinidae	カマス科の一種 Sphyraenidae, gen. et sp. indet
コイ <i>Cyprinus carpio</i>	カレイ目 Pleuronectiformes
ギンブナ <i>Carassius auratus</i>	ヒラメ科 Bothidae
ニゴロブナ <i>Carassius auratus</i>	ヒラメ <i>Paralichthys olivaceus</i>
フナ属の一種 <i>Carassius</i> sp.	カレイ科 Pleuronectidae
コイ科の一種 Cyprinidae, gen. et sp. indet	カレイ科の一種 Pleuronectidae, gen. et sp. indet
ナマズ目 Siluriformes	ウシノシタ科 Cynoglossidae
ナマズ科 Siluridae	ウシノシタ科の一種 Cynoglossidae, gen. et sp. indet
ナマズ属の一種 <i>Silurus</i> sp.	フグ目 Tetraodontiformes
サケ目 Salmoniformes	フグ科 Tetraodontidae
	フグ科の一種 Tetraodontidae, gen. et sp. indet

表3 久留米藩蔵屋敷跡SK01出土貝類一覧表

腹足綱	節	報告分	備考	最小 個体数	%	二枚貝綱	節				報告分				備考	最小 個体数	%
							左	左右	右	?	左	左右	右	?			
クロアワビ	1	1	-	2	1.00	アカガイ	×	×	×	3	4	×	4	×	-	6	3.00
クロアワビ?	×	1	-	1	0.50	シジミ (ヤマト/マ)	29	2組	57	73	22	6組	16	×	-	118	58.7
サザエ	1	10	-	11	5.50	ハマグリ	17	×	26	×	18	19組	16	3	-	63	31.3
小計	2	12		14	7.00	小計					135					187	93.0

表4 久留米藩蔵屋敷跡SK06出土貝類一覧表

腹足綱	節	報告分	備考	最小 個体数	%	二枚貝綱	節				報告分				備考	最小 個体数	%
							左	左右	右	?	左	左右	右	?			
クロアワビ	1	×	-	1	0.05	アカガイ	7	×	5	3	1	1組	×	×	-	12	0.62
サザエ	12	5	-	17	0.88	イタボガキ科	×	×	×	1	×	×	×	×	-	1	0.05
アカニシ	×	1	-	1	0.05	シジミ (ヤマト/マ)	1109	47組	1276	361	6	1組	×	1	-	1504	78.0
キサゴ	1	×	-	1	0.05	セタシジミ	18	5組	25	×	×	×	×	×	-	30	1.60
バイガイ	1	×	-	1	0.05	アサリ	26	17組	31	×	×	×	×	×	-	48	2.50
ツメタガイ	1	×	-	1	0.05	イタヤガイ	×	×	1	×	×	×	×	×	-	1	0.05
ホソウミニナ	10	×	-	10	0.51	ハマグリ	190	52組	161	×	4	6組	1	-	252	13.1	
トサスソキレ	13	×	食用×	13	0.67	チョウセンハマグリ	1	×	×	×	×	×	×	-	1	0.05	
フジツボ	4	×	食用×	4	0.21	バカガイ	1	×	×	×	×	×	×	-	1	0.05	
フトコロガイ	1	×	食用×	1	0.05	オキシジミ	1	×	×	×	×	×	×	-	1	0.05	
不明巻貝	4	×	食用×	4	0.21	小計	1820				31					1851	96.1
カワニナ	16	×	-	16	0.83												
オオタニシ	7	×	-	7	0.36												
小計	71	6		77	3.97												

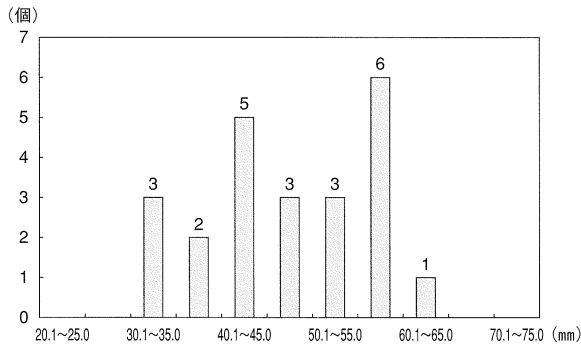


図39 SK01出土ハマグリ の殻長分布

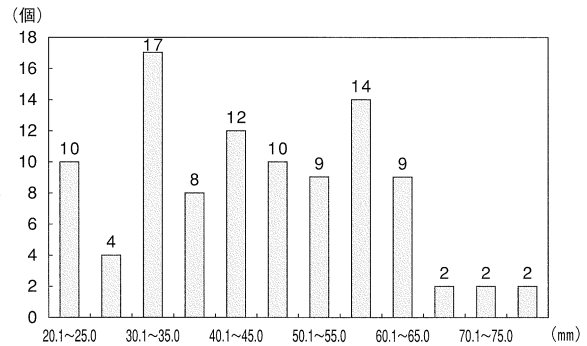


図40 SK06出土ハマグリ の殻長分布

表5 久留米藩蔵屋敷跡SK01上層出土魚類遺存体一覧表

SK01上層	前頭骨		前上顎骨		主上顎骨		歯骨		角骨		方骨		主鰓蓋骨		前鰓蓋骨		擬鎖骨		口蓋骨		椎骨	その他	計
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R			
アジ科			1	2	1			1		1	1										26	稜鱗(2)	33
アマダイ属							1															1	
アユ																						1	
エイ類																						2	
カツオ																						11	
カマス科		1																				9	
キス科						1																1	
コイ科								1														3	咽頭骨(R1) 背鱗棘(R1)
コチ科									1													5	
サバ属				1							1											14	
シイラ属																						2	
トビウオ科																						1	
ナマズ属																						8	
ニシン科																						12	
ニベ科		1																				13	肩甲骨(R1)
ハモ科																						8	
フグ科			1																			1	
フサカサゴ科		2				1																3	
フナ属																						1	咽頭骨(L1)
ブリ属				1																		1	
ボラ科																						3	
マイワシ							1	2		2												2	舌顎骨(L1)
マダイ				1		1				2	2	1										11	肩甲骨(L1) 後側頭骨(R1) 舌顎骨(L1R1)

表6 久留米藩蔵屋敷跡SK01下層・SK06出土魚類遺存体一覧表

SK01下層	前頭骨		前上顎骨		主上顎骨		歯骨		角骨		方骨		主鰓蓋骨		前鰓蓋骨		擬鎖骨		口蓋骨		椎骨	その他	計		
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R					
種類																									
アジ科		2					1			2												25	稜鱗(8)	40	
ウナギ属																						7		7	
エイ類																						1		1	
カツオ						1						1										6	尾部棒状骨(1)	9	
カマス科								1														7		8	
コイ																							咽頭骨(R1)	1	
コイ科																						10		10	
コチ属																						2		2	
サバ属							1				1											15		17	
サメ類																						1		1	
シイラ属																						1		1	
トビウオ科																						1		1	
ナマズ属		1																				2	胸鰭棘(L1)	4	
ニシン科																						13	尾部棒状骨(2)	15	
ニベ科																						1		1	
ハゼ科						2																		2	
ハタ科																						1		1	
ハモ属																						4		4	
フサカサゴ科		1																						1	
ブリ属																						4		4	
ボラ科													1									2		3	
マイワシ						1				1													舌顎骨(L1)	3	
マダイ		1	2		1	1	1	1		1		1			1								舌顎骨(L1)	11	
マダラ																						2		2	
マハタ属						1																		1	
SK06	前頭骨	前上顎骨	主上顎骨	歯骨	角骨	方骨	主鰓蓋骨	前鰓蓋骨	擬鎖骨	口蓋骨	椎骨	その他										計			
種類	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R					
アイゴ科																						1		1	
アジ科			1			1		1	1		2											5	頭蓋骨(1) 肩甲骨(L1)	13	
アマダイ属				1				1		1		1	1							2		1	舌顎骨(R1)	9	
ウシノシタ科																						6		6	
エン科		1																						1	
オコゼ類												1		1										2	
カタクチイワシ																							舌顎骨(R2)	2	
カツオ																					1		基鰭骨(L1)	2	
カレイ科																			1					1	
ギンブナ																							咽頭骨(L4R5)	9	
クエ																								1	
コイ																							咽頭骨(R1)	1	
コイ科																							臀鰭棘(4)	5	
コチ科								1							1							7		9	
サケ属																								1	
サバ属																								2	
サワラ																								2	
シイラ				1																				1	
スケトウダラ							1																	1	
スズキ		1	1			2						1				1						5	副蝶形骨(1)	11	
タイ科		1		1				1		1	1		1	3								2	肩甲骨(L2) 副蝶形骨(2) その他(5)	20	
タラ科																								12	
ナマズ																							2	胸鰭棘(1)	3
ニゴロブナ																							咽頭骨(L2R3)	5	
ニベ科			1	2	2			1			1													3	
ハモ属							1	1					2									8		12	
ヒラメ								1																4	
フグ科				1																				2	
フサカサゴ科		1			1	2	1	1	1						1					1			舌顎骨(L1) 肩甲骨(R1)	10	
フナ属															1								舌顎骨(L1) 咽頭骨(L2R3不明4)	11	
ブリ属								1																1	
ホウボウ科																					1			1	
ボラ科																						4		4	
マアジ属																1							舌顎骨(R1)	2	
マイワシ																							舌顎骨(L2R4)	6	
マダイ	12	5	4	4	5	2	1	2	2	6	5	5	7	2	4	2	1	4	4			22	舌顎骨(L2R2) 肩甲骨(L2R3) 副蝶形骨(1) 鋤骨(2) 翼耳骨(3) その他(12)	128	
マダラ						1						1										7	基後頭骨(2) 副蝶形骨(1)	12	
ミシマオコゼ科																							不明(1)	2	
ムロアジ属										1		1											頭蓋骨(2)	4	

大阪大学埋蔵文化財調査室年報 1

2004年 3 月発行

編集 大阪大学埋蔵文化財調査室

発行 大阪大学埋蔵文化財調査委員会
(委員長 鷺田清一)

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1

印刷 (有) 真 陽 社
